

# 国語問題

はじめに、これを読むこと。

## (注意事項)

1. この問題用紙は十七ページまである。
2. 解答用紙の所定の欄に、必ず氏名を記入すること。
3. 解答用紙には受験番号が印刷されているので、受験票と照合して受験番号が正しいかどうか確認すること。
4. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外のところには何も記入しないこと。
5. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入すること。
6. 訂正は消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
8. 文字は一点一画まで正確に書くこと。
9. 解答用紙は持ちかえらないこと。
10. この問題用紙は必ず持ちかえること。
11. 試験時間は六〇分である。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
	

(一) 次の文章を読み、後の問に答えよ。

私たち人間が持つ様々な認知能力の基礎的なものは、人間以外の動物も持っている。モノを知覚し、そこからモノの性質や運動を予測し、因果関係を推論する能力は、人間以外の動物にもあるし、その能力が人間よりも優れている場合すらある。

しかし、私たちは言語を持つことによって、動物が持たない認識を持つ。モノを知覚的な類似性や、食べられる、食べられないといったような限られた機能性だけに基づいて分類するのではなく、複数の観点から分類し、網の目のような巨大な概念

A をつくり上げることができるようになったのである。そして、文脈、用途に応じて異なる視点から「同じモノ」を取り出して、様々な種類、階層のカテゴリーをつくることもできるようになった。それらのカテゴリーに名前がつけられると、人はそれらを「同じもの」として認識し、モノ同士の見た目が大きく違っていても、名前の共有を手がかりに、見たことがないモノの性質や行動について、予測をすることができる。つまり言語によって、人間は、モノ同士の分類を超えて、モノを変数にした抽象的な関係のカテゴリーを自由自在につくることを可能にし、比喻や類推によって、実際には存在しない関係の類似性の気づきにまで発展させることができるようになったのである。

まとめると、人は言語によって、まったく違うモノによる、見た目にはまったく異なるモノ、出来事、事象を「同じモノ」「同じ事柄」として認識し、イメージを共有し、互いに伝え合うことができるようになるのだ。言いかえれば、言語は、われわれ人間が、環境を多様な見方で眺め、認識の基本的なパーツ、つまり、ヒト以外の動物も持っている、知覚能力、カテゴリー形成能力、推論能力など、基本的な認知能力のそれぞれを、用途に応じて組み合わせることを可能にしているのである。

b パーツを組み合わせる、ということは一＋一＝二にする、ということではない。例えば、大きな数になっても、「見た目」ベースの概数としての数ではなく、正確な数が存在する、という認識は、「1」ということばが、「2個ではなく、0個でもなく、ただ一個のモノ」に対応する、ということの気づきから始まる。この気づきのあと、今度は「2」ということばは「1個ではなく、三個以上でもなく、きっかり二個のモノ」に対応する、ということを知る。

最初は1の意味、2の意味は別々に学習される。しかし、「2」ということは覚え、その意味を知ると、そういえば「1」ということばもモノの数を表すことばだと思ひ出す。すると「3」の意味の理解は、「2」の意味の学習よりずっと楽になる。「3」は「1」「2」と同じように数に、関する、ことばであることに気づけば、「3」を「1」「2」と比べ、1でも2でもなく、「たぐさん」でもない、三個という正確な数のモノを表すことばだと知る。

子どもはこのように一つひとつのことばの意味を学習すると、すぐに複数のことばを関連づけ、そこに潜む規則性(パターン)を抽出し、その後の学習を加速し、さらに深いものにしていくのである。

モノを表すことばを学習していくとき、子どもは最初の数カ月は身近なものの名前を、一つひとつゆつくりと覚えていく。しかし数カ月たち、覚えたことばがある程度たまると、子どもは、ことばはどのようなカテゴリーに対応づけられるのかというように、抽象的な知識を獲得する。そこからさらに、一つの事例と結びつけられたことばは、他のどのような対象に使えるのか、というように考えを進め、ことば全般に適用できるパターンを抽出するようになる。そして、実際に、そのパターン(規則性)を、初めて見る対象にもどんどん適用するようになるのである。すると、子どもが覚えることばの数はそれまでと比べ物にならないほど増え、新しいことばの学習はどんどん加速していくのだ。

子どもがどのように新しいことばを学習していくのかについては、ここではこれ以上触れないが、このように、子どもが何かを一つひとつ覚えていくと、そこから規則性を抽出して、その規則性を使って学習を加速させ、どんどん知識を深めていく、というものは、ことばの学習の場面に限らず、子どもの知性の発達の中で、非常によく見られることだ。

そして、このことは人間以外の動物と人間を隔てる特徴であるといえる。チンパンジーなどの動物に数のシンボル(算用数字や漢数字)と数(例えば棒の数)を訓練して学習させることは可能だ。しかし、訓練をするとき、1と棒一本、2と棒二本の対応づけを学習すると、それ以降、3と棒三本、4と棒四本、5と棒五本と、数を増やしていったときに、学習が加速していき、図形シンボルと棒の数の対応づけにかかる時間が短くなっていくということは、ヒト以外の動物では観察されていない。

同様に、チンパンジーに、「靴」に対してこの図形、「鍵」に対してあの図形、というように、モノとシンボルの対応づけを学習

させるときに、新しい対応づけを学習するのに必要な時間が、学習の途中から劇的に短縮される、ということは見られない。人間の子どもの場合、規則性が抽出された後は、新しいことばは、ほぼ即時に学習され、直接教えられていない対象にもそのことばを正しく使うことができるようになるのは、非常に対照的だ。

<sup>d</sup> このような規則性の抽出に、ことばが存在するということがそれ自体が大きな役割を果たす、と考えることができる。先ほど、ことばは、見かけの類似性を超えた「同じ」という認識を与える、と述べた。ことばの意味の学習とは、単に、一つのモノの事例とある特定の音の列の結びつきを覚えることではない。そのことばが指し示す対象の集合(つまりカテゴリ)との対応づけを学習することなのである。子どもは、似ているが、同時に互いに少ずつ違う対象に対して、同じことばが使われるのを経験し、それらの違うモノたちが、実は同じなのだ、という認識を得るようになる。これもまた、個別のことばと個別のモノの結びつきの学習を超えた認識なのだが、この認識が、さらに様々な規則性の抽出を助けるのだ。

**I** 「いち」ということばが、正確にモノ一個に対応することを学習するということは、大人の私たちからみれば、簡単なことに思えるかもしれない。しかし、子どもの身の回りには、様々なモノがあふれている。バナナ一本、バナナ二本、りんご一個、おもちゃのくるま一個……。「いち」ということばとともに、子どもはこれらの様々なモノたちが有るシーンに遭遇する。その中から、数という意味ではバナナ一本とバナナ二本が同じではなく、バナナ一本、りんご一個、くるま一個が、同じなのだ、と気づくのは、実はそんなに容易なことではないのである。

**II** そこで「いち」ということばは、それらの、見た目には非常に多様なモノからなる雑多なシーンの間の **B** — つま  
りどのシーンもモノが一個である——ということ子どもに気づかせるのに、非常に大きな力となる。この理解を足がかりにして、子どもは数の集合という認識を得、数という抽象的な認識を得る。人は、そこからさらに、モノと対応づけられる数、つまり自然数を超えて、有理数、無理数、さらには虚数という概念にまで発展させていくことができたのである。つまりことばは、 $1+1$ を2ではなく、見かけの類似性を超えた「同じ」を見つけ、子どもが、思考を、どんどんと、どこまでも抽象的な概念世界へ発展させていくことを可能にする道具なのである。

Ⅲ 言語は、世界を様々な異なる視点からまとめめる。例えば、あなたの家にいる「タロー」という犬は「イヌ」であると同時に「ペット」であり、「ダックスフント」というイヌでもあり、「哺乳類」であり、「動物」であり、「生き物」である。子どもは言語を学習するともに、一つのモノを様々な階層でまとめあげ、それぞれのカテゴリーに別の名前がつくことを知る。

Ⅳ 文をつくるとき、同じことを伝えるのに、同じ事柄でも、何(誰)を強調したいかによって、主語と目的語を入れ替えた、受け身の言い方(受動形)をしたり、様々な構文を使って、違った言い方ができる。子どもは、自分に対しての話し方だけではなく、大人同士が話すのを聞いて第三者同士が何をしているのか、何を考えているのかを知る。

Ⅴ つまり、言語は、子どもに、自分以外の視点から世界を眺めることを教え、世界を様々な異なる観点からまとめ得ることに気づかせ、様々な切り口、様々な語り方で自分の経験を語ることを可能にし、さらに、経験を複数の様々な視点、観点から反芻することを可能にするのだ。そのことに対する気づきそのものが、ヒトの子どもを、ヒト以外の動物が持ちえない、柔軟な思考へといざなうのである。

子どもが言語の学習によって得るものは、はかり知れないほど大きい。言語を学ぶことは、コミュニケーションの手段を得ることである。言語で互いの意思や気持ち、考えを伝え合うことができる能力は、人間と動物を隔てる大きな違いである。しかし、言語が子どもにもたらすものは、単にコミュニケーションの手段にとどまらない。子どもは言語を学ぶことで、それまでと違った認識を得る手段を得、思考の手段を得るのだ。

私たちの知性にとって重要な、ほぼあらゆる分野で、言語は、認知革命ともいえる認識の大きな変容をもたらす。モノの認識において、見た目の類似性による「同じ」という認識から、抽象的な関係に基づいた「同じ」という認識への移行をもたらす。数の認識において、「大体の量から「正確な数」の概念へ移行させる。空間の認識において、絶対的な方角を基準にしたモノ同士の空間関係の認識から、自分、あるいは身近なモノ(あるいは人)を中心にした相対的な空間関係の認識への移行をもたらす。つまり、言語は、私たちが様々な視点からモノや出来事について語ることを可能にした。このような視点の多様化が柔軟な認識をもたらすのである。

動物と人間の知性の違いは甚だしく大きいが、それは単純に遺伝子の違い、脳の構造の違いにすべて起因するものではない。人間の認識の基礎になるほとんどの要素は、人間以外の動物にも共有されている。ことばを話す以前の人間の赤ちゃんの認識は、人間の大人よりも、動物のそれに近いといつてよいかもしれない。人間以外の動物と人間の子どもの間で大きく異なるのは、持っている知識を使つて、さらに学習していく学習能力なのだ。言語は、私たち人間に、伝達によつてすでに存在する知識を次世代に伝えることを可能にした。しかし、それ以上に、教えられた知識を使うだけでなく、自分で知識を創り、それを足がかりにさらに知識を発展させていく道具を人間に与えたのだ。

(今井むつみ『ことばと思考』による)

問一 傍線 a「私たち人間が持つ様々な認知能力の基礎的なものは、人間以外の動物も持っている」とあるが、人間以外の動物も持っている認知能力として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 モノ同士の分類を超えて抽象的に認知する能力
- 2 機能性に基づいてモノのカテゴリを形成する能力
- 3 異なる視点から「同じモノ」を取り出して名づける能力
- 4 認識の基本的なパーツを用途に応じて組み合わせる能力
- 5 名前の共有を手がかりに見たことがないモノの性質や運動を予測する能力

問二 空欄 A に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 ネットワーク
- 2 カテゴリ
- 3 イメージ
- 4 パターン
- 5 バリエーション

問三 傍線b「パーツを組み合わせる、ということとは単に「1+1=2」にする、ということではない」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 「1」ということばの意味を学習すれば、初めて見る対象が一個か二個かという以上のことが理解できる。
- 2 「1」と「2」の意味が別々に学習された後、大きい数の習得はその組み合わせによって進むわけではない。
- 3 「2」ということばの意味は、単に「1」というパーツが二個あるという気づきによって得られるのではない。
- 4 パーツを組み合わせると、一つのモノの事例とそれを表すある特定の音の列との結びつきが学習しやすくなる。
- 5 子どもは、一つひとつのことばをばらばらに覚えるだけではなく、複数のことばを関連づけて規則性を抽出する。

問四 傍線c「モノを表すことばを学習していくとき」とあるが、人間の子どものことばの学習過程として、当てはまらないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 覚えたことばがある程度たまると、そのことばが指し示す対象の集合という認識を形成するようになる。
- 2 モノとシンボルの対応づけの学習が進んでいくと、新しい対応づけを学習するのに必要な時間が短縮される。
- 3 似ているが少しずつ違う対象に同じことばが使われることを学習し、それらの対象に階層があることを知る。
- 4 覚えたことばを特定の事例と結びつけるだけでなく、他のどのような対象に適用できるか考えるようになる。
- 5 抽出した規則性を、すでに知っているモノだけでなく、初めて見る他の対象にも実際に適用するようになる。

問五 傍線 d「このような規則性の抽出に、ことばが存在するということそれ自体が大きな役割を果たす」とあるが、ことばの存在が果たす役割として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 ことばを学ぶことで、子どもは、規則性を抽出して、教えられた対象に適用できるようになる。
- 2 ことばを学ぶことで、子どもは、個別事例とそのシンボルを対応づけることができるようになる。
- 3 ことばを習得して初めて、子どもは、互いの意思や気持ち、考えを伝え合うことができるようになる。
- 4 ことばの存在によって、子どもは、他者の視点から眺めた世界にも規則性があることを知るようになる。
- 5 ことばを媒介に、子どもは、互いに少しずつ違う対象が実は同じカテゴリーに属すると認識するようになる。

問六 空欄 B に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 共通性
- 2 場面性
- 3 関係性
- 4 総合性
- 5 融合性

問七 傍線 e「二つのモノを様々な階層でまとめあげ、それぞれのカテゴリーに別の名前がつく」とあるが、その具体例として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 大人が「腹」「お腹」と呼ぶ対象を、子どもは「ポンポン」と呼ぶ。
- 2 「ミカン」は、「かんきつ類」であり、「果物」であり、「食べ物」である。
- 3 どの植物が「ハーブ」で、どの植物が「雑草」であるかは、文化によって異なる。
- 4 数には、自然数だけでなく、有理数、無理数、さらには虚数という概念まで存在する。
- 5 「和室」「日本画」「邦画」では、それぞれ「和」「日本」「邦」が、「日本の」ものであることを表す。



(二) 次の文章を読み、後の問に答えよ。

幼い頃から体の弱かった私は、よく風邪をひいて学校を休み、高熱がひくまで蒲団の中でじつとしていて、少しおさまつてくると本を読んだ。漫画のときもあれば、童話のときもあった。本が好きだったというのではなく、当時は今みたいに多種多彩なおもちゃがなかったからである。しかし私が本当に小説を、それも子供の読むものではなく、おとなの小説を好きになったのは中学二年生のときであった。ある人から貸してもらった井上靖氏の「あすなる物語」を読んで、小説とはなんとすばらしいものであるうかと感動したのだった。

ちようどその頃、父が事業に敗れて、家計は苦しかった。私はわがままな一人息子だったから、本屋で読みたい本の背表紙を睨み、母の財布の中味を承知していながらも、執拗に、買ってくれ、買ってくれとねだった。それが叶えられぬと判ると、ふくれつ面をして、押し入れの中にもぐり込んで出てこなかったり、座蒲団を蹴りつけたりした。私は中之島の図書館へ行き、本を読んだが、読むほどに自分も本が欲しくなってきた。

ある日、母と梅田の繁華街へ行った。何の用事で出掛けたのかは覚えていない。とにかく二十年も昔のことである。商店街の道端で、男が莫塵を敷いて坐っていた。莫塵の上には無数の古い雑誌や本が乱雑に置かれていた。その中に、手垢で汚れた文庫本が十冊ずつ一組にされて紐で束ねられてあった。値段を訊くと、どれも一組五十円だという。母に買ってくれと頼むと、母は財布から十円玉を五つ出した。五十円とて、私たちにとっては大金だったのである。私は男に、好きな本を十冊選ばせてくれと言った。男は邪魔臭そうな顔をして、

「あかん、あかん、一束なんぼや。そんなことされたら、全部紐をほどこかなあかんやないか」

と言った。私は、ほどこいた紐は全部自分でくくりなおすからとねばった。男はしぶしぶ承知した。確か十五、六束並べられていた文庫本の中から、私は十冊を選び出し、残りの全部の束がそれぞれ十冊となるようにして紐でしぼりなおした。それは随分時間のかかる面倒な作業であったが、ともかくも十冊の自分の本を手にすることが出来たのである。レマルク「凱旋門」、ドスト

エフスキー「貧しき人々」、カミュ「異邦人」、ダビ「北ホテル」、石川達三「蒼氓」<sup>そうぼう</sup>、高山樗牛「滝口入道」、X「たけくらべ」、三島由紀夫「美徳のよろめき」、井上靖「狼銃・闘牛」、徳田秋声「あらくれ」。この十冊であった。そしてこれは私が読んだ十冊の文庫本の順番をも意味している。凱旋門を最初に読み、次は貧しき人々を読み、そして異邦人という具合である。この中で中学生が読むものといえば「たけくらべ」ぐらいだったろう。なぜなら、その一部は国語の教科書にノ<sup>ノ</sup>つていたからである。なぜ、その十冊を、Aに耐えながら選り出したのか、それも遠い昔のことと覚えてはいない。だが、露天の裏から選りだし、私が中学二年か三年の終りにかけて、それら十冊の文庫本を何度も読み返したことは、何か不思議な天恵であると同時に宿命でもあったのだと思えてならないのである。私はなんと見事に名作ばかり選り出したことであろう。なんと見事に、かたよった読書からまぬがれ得たことだろう。そしてなんと見事に、最も純粹で吸収力の強い年代に、それらとめぐり合ったことであろう。そのことを不思議と言わずして何と言うべきか。「貧しき人々」は、それから二十年後、私に「錦繡」を書かせた。他の九冊も私のこれまでの作品に、そしてこれからの作品に影響を与えていくに違いない。私は十冊の文庫本に登場する人々から、何百、いや何千もの人間の苦しみや歓びを知った。何百、何千もの風景から、世界というものを知った。何百、何千ものちよつとした会話から、心の動き方を教わった。たった十冊の小説によつてである。

若者の多くは、そのとき楽しければいいもの、つかのま笑い転げるものしか求めなくなり、人間の魂、人生の巨大さを伝える小説を読まなくなった。そうすることによつて、自分を見つめられなくなった。他者の苦しみと同苦出来なくなった。いい小説と対峙<sup>ハ</sup>するには、それなりの精力が必要である。その精力と、それに伴う努力を惜しんで社会に出て行く。父となり母となつていく。恐<sup>ホ</sup>しいことである。惜<sup>ヒ</sup>しむべきことである。私は何の取り得もない人間で、頭も悪く、腕力もなく、わがままでオク<sup>ニ</sup>ビヨウで嫉妬深い。けれども、たったひとつ取り得と呼べるものをあげると言われたら、私は多少は他者の苦しみと同苦出来ることだと、いささか声を落として答えるだろう。答えた瞬間、私の心には必ず、あの十冊の手垢に汚れた文庫本の束がよぎる<sup>ウ</sup>筈である。

(宮本輝『命の器』による)

問一 傍線口、二のカタカナを漢字で記せ。

問二 傍線イ、ハの読み方をひらがなで記せ。

問三 空欄 A に入る表現として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 男の貧相な子をあわれむような視線
- 2 男のもどかしさを抑えたような視線
- 3 男の人をさげすむような冷たい視線
- 4 男の邪魔臭さをあからさまにした視線
- 5 男の変わり者を見るような好奇心な視線

問四 傍線 a「何か不思議な天恵であると同時に宿命でもあったのだと思えてならないのである」とあるが、この部分の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 大人の小説を好きになったことが、世界というものを知るきっかけを筆者に与えてくれたと思っている。
- 2 純粋で吸収力の強い年代に読書に耽<sup>かか</sup>つたことが、筆者をわがまま放題の青春から脱出させたと思っている。
- 3 人間の魂、人生の巨大さを伝える小説との出会いが、筆者を作家へと方向づけることになったと思っている。
- 4 一冊でなく十冊まとめて買ったことが、結果的に幅広いジャンルの名作を読むことにつながったと思っている。
- 5 十冊の文庫本が、何の取り得もない人間だと思っていた筆者を作家へと駆り立てることになったと思っている。

問五 傍線b「恐しいことである。惜しむべきことである」という言葉には筆者のどのような思いが表現されているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 中身の無い娯楽にばかり興じ、幼稚化した若者が親になるということは、なんと情けないことか。
- 2 真の名作は行間を読むものなのに、上っ面の読書しかしない人が増えるのは、なんと残念なことか。
- 3 名作と向き合い、人間と世界について深く考えることのできない大人が増えるとは、なんと嘆かわしいことか。
- 4 子どもたちが時間と労力を要する読書を嫌がり、つかのまの楽しみしか追い求めないとは、なんと口惜しいことか。
- 5 主体的、意欲的に本を選び、時間をかけて読む人が減ることで、謙虚な人間が少なくなるのは、なんと寂しいことか。

問六 傍線c「いささか声を落として答えるだろう」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 自己を主張するのが苦手な人間であるから。
- 2 他人に対して厳しい己を自制しているから。
- 3 慇懃無礼な自らを恥じる気持ちで頭をよぎるから。
- 4 すべては無であるという虚無的な人生観を持つているから。
- 5 自分というものを顧みたとき、そう言いきる自信がないから。

問七 空欄

X

に入る人名として適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 幸田露伴
- 2 樋口一葉
- 3 永井荷風
- 4 尾崎紅葉
- 5 与謝野晶子

(三) 次の【I】【II】の文章を読み、後の問に答えよ。

【I】

黒谷門前に道心の庵あり。夜な夜な戸を叩きて、「誰ぞ」といへば、逃げて行く者あり。今宵も来たらば捕らへんとて、道心者十人ばかり待ちかけしが、夜半の頃に、例のごとく、ことごとと叩く。「**A** 来たぞ」とて、手毎に灯をともし、棒を持ち出でて捕らへたり。「何者ぞ」といへば、「盗人でもござらぬ。毎夜戸を叩くも、皆これごしやうのためでござる」といふ。「こは何事ぞ」といへば、「はてさて、道心に似合はぬ事を仰せらるる。貞安の御談義に、『**B** とかくこのよは仮りのよぞ。道心おこせ』とのおすすめなれば、毎夜おこします」といふた。

(『当世手打笑』による)

【II】

田舎者、京内参りをしけるに、味噌屋の看板を見て、手を打つて帰り、亭主にいふやう、「都の名所、残りなく拝みめぐりたり。都とて、もつともらしき事を書き置きたり」といふ。亭主、「それはいかやうの事」といふ。「されば麩屋町とやらんに、うへみそと書き付けてあり。さてもさても、りくつを書きたり」と感じければ、亭主、をかしく思ひて、「それはめづらしき事かな。いかやうの子細にて **B** 』といへば、』さてさて、亭主は京にゐても、これを知らぬか。うへうへみそといふ事は、『上を見れば限りがないぞ、ただ下を見よ』といふ事にて、庭訓にもある事ぢや」といはれた。

(『当世はなしの本』による)

〈注〉 道心…仏道修行をする人または仏道を求める心。

貞安の御談義…高僧・聖誉貞安のお説教。

京内参り…京都市中を見物すること。

庭訓…庭訓往来。初等教育に用いられた教科書。

問一 空欄

A

に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 しばし
- 2 あはれ
- 3 すはや
- 4 やをら
- 5 どうど

問二 傍線 a「しやう」を漢字で記せ。

問三 傍線 b「とかくこのよは仮りのよぞ。道心おこせ」とあるが、貞安<sup>ていあん</sup>の意図する「よ」と「おこせ」の漢字の組み合わせとして最

も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 夜・起こせ
- 2 夜・熾こせ
- 3 世・発こせ
- 4 世・遣こせ
- 5 予・興こせ

問四 傍線 c「手を打つて」と同じ意味を表す慣用句として最も適切なものを次の中から一つ選び、番号をマークせよ。

- 1 耳を疑う
- 2 鼻を折る
- 3 頭を搔く
- 4 膝を叩く
- 5 目を細める

問五 傍線d「もつともらしき事」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 こじつけたこと
- 2 道理になかったこと
- 3 もったいぶったこと
- 4 もつとも愚かなこと
- 5 都会的でしたこと

問六 傍線e「みそ」を、「田舎者」は、どのような意味にとったのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 見れば
- 2 見よう
- 3 見るな
- 4 見るぞ
- 5 見ても

問七 【Ⅱ】の話の内容から、「うへうへみそ」は、味噌屋の看板にどのように表記されていたと考えられるか、記せ。

問八 空欄 

B
---

 に入る言葉として最も適切な動詞を【Ⅰ】の文章から抜き出せ。

問九 右の二つの作品は、いつごろの作品と考えられるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、番号をマークせよ。

- 1 奈良時代
- 2 平安時代
- 3 鎌倉時代
- 4 室町時代
- 5 江戸時代